

論文

宇野千代編輯の雑誌『スタイル』第3巻における服飾記事

Clothing articles in the magazine *SUTAIRU*, Volume 3, edited by Uno Chiyo

松 尾 量 子

Ryoko Matsuo

This paper examines the changes in clothing articles in the third volume of *SUTAIRU*, a magazine edited by Uno Chiyo, in the process of its transformation from a “fun and stylish magazine” that dealt with overseas fashion information and fashionable lifestyles to a magazine that was in line with national policy.

I. はじめに

昭和戦前期の雑誌『スタイル』は、1936（昭和11）年6月に小説家宇野千代によって、欧米のおしゃれな生活を伝えるグラビア雑誌として創刊され、編輯方針を変化させながら、1941（昭和16）年9月まで出版された。第2巻第3号（1937年3月号）の編輯後記には「軍部と政党がどうなってもスペイン内乱がいつまで続いても、せめてそんなイザコザの一行も書いていない雑誌が一冊位あっても好いんじゃないでせうか？」¹⁾と記されており、『スタイル』は、日中戦争が始まった後も海外のファッション情報やお洒落な生活を取り扱う「楽しい総合雑誌」として編輯されていたが、第3巻第9号（1938年9月号）から国策を意識した雑誌への転換が始まり、第5巻第9号（1940年9月号）から生活指導雑誌となる。本稿では、『スタイル』が楽しいお洒落雑誌から国策に沿う雑誌への転換を始める時期にあたる第3巻の服飾記事の検証を行う。資料は臨川書店による復刻版『スタイル』（2003年）を用い、引用に際して、仮名遣いは原文のままとし、旧漢字は現在の形に改めた。

II. 第3巻第1号（1938年1月号）から第3巻第8号（1938年8月号）まで

1937（昭和12）年8月に国民精神総動員法が実施され、10月には毛織物、12月には綿製品に対するステープル・ファイバー（ス・フ）の混用規制が公布された。また、商工省後援・日本洋裁家連盟主催による「非常時婦人活動服展」（11月9日－23日 銀座

松坂屋）が開催されており²⁾、新聞や雑誌においても、非常時の服装が取り上げられるようになっていた。³⁾

第3巻第1号の編輯後記には、「増頁問題、値上問題はもうすでに長くスタイルの宿題になってゐるし、また各方面から頻りと要望されたり、事実毎月の編輯プランの満載振りはいつもながらどうにも誌面おすなおすなの狭小さを感じてはゐるのですが、スタイルはしばらく誰でもが気軽に手にとれるジャンティなお洒落雑誌をつづけたい。」⁴⁾と記されている。第3巻から「美貌研究室」「ヴォーグ・スタデオ」「お洒落男子部」「スタイル専科」が新設されており、海外ファッション情報を中心としたグラビア頁やお洒落コントなどの読みもの、女優の訪問記など盛りだくさんの内容である。1938年5月には、「婦人雑誌ニ対スル取締方針」が公布され、雑誌メディアに対する統制が強まりつつあったが、『スタイル』は、表面的には編輯方針を変えることなく刊行されており、創刊3周年となる第3巻第6号の編輯後記には、「スタイル独自の、洒落たエレガな明るさがいっぱい匂ってゐるつもりです」⁵⁾と記されている。第8号の新聞広告には「日本で一番楽しいお洒落雑誌」⁶⁾というコピーを確認することができる。一方で、第7号からは巻末に、「お読みになったあとは皆さんのスタイルを戦地の兵隊さんに送ってあげて下さい」という文章が掲載されており、国策に沿う雑誌への転換に向けた準備が始められていたと推察できる。

1) 「スタイル・ニッポン」とミリタリーファッション

『スタイル』において、初めて戦争が現れたのは、第2巻第9号（1937年9月号）に掲載された谷長二による「スマートエコノミイ」であった。谷は当時銀座伊東屋の洋服部に勤務しており、『スタイル』では、第1巻第7号（1936年12月号）から、経済的な視点を入れてお洒落を指南する「スマート・エコノミイ」を連載している。第3巻第1号の「スマート・エコノミイ」では、輸入禁止や輸入制限が衣料品に与える影響が取り上げられている。第3巻第2号からは、タイトルを「スタイル・ニッポン」として掲載されている。谷は、日本は世界の一等国であり、首都東京の銀座は日本文化のショーウインドウのようなもので、そこで「着こなされた服装のモードには、その時代のすべての空気が反映」されているとして、婦人服におけるテーラードスーツの流行や男子服のオーバーがミリタリー調になってきたことなども「時代の動きと密接な関係」があり「時代の要求するスタイルこそ、本当のモード」であると述べている。⁷⁾そして、背広は日本の働くための日常服であり、そこに日本的なセンスが生まれるのは当然であるが、新しいものを取り入れすぎなのではなく、

日本のセンスを持った正しい日本のスタイルを作るためには、世界の隅から集まって来るあらゆるモードの参考資料を、よきセンスで選りわけて日本のものにすることが、正しい行き方で、当然、日本に於けるファッションの統制といふことが、行われなければなりません。モードとは一貫した主流をなして絶えず流れ進むベルグソンの創造進化の説を具現したやうな、力の働きと、それにつれて時代考尚が反映した時々刻々の変化を刻むところ、ファッションと云ふものの合成から成立つもので御座居ます。

今日、世界の服装の規範的源流を形作ってゐる、ロンドン、パリ、ニューヨークの流行の粋を取って、これを日本的に咀嚼適合させたものであるならば、これを日本的現代の服装として、さしつかへないと思ひます。⁸⁾

と述べている。そして、「この後、わたくしの考へる文化の実需洋品の基本的なファッションについて、スタイル・ニッポンの名によりご紹介申し上げます。

ますから御きたい下さい。」と強い意欲が語られている。⁹⁾しかし、第3号では、先月は羊毛や木綿の輸入制限によって「非常時を味はされた」ために理論めいたことばかり書いてしまったと弁明した上で、以下のように続けている。

近代人は非常時だからと云って、軍歌ばかり聞かされたら、反動的に、ロマンチックなものにアコガれるもので、スタイル誌の行き方も、当然そうでありますので、これからのち、なるべく、固い事は書かぬ様にしようと思ひます。

と云って、文筆家でない僕が『モード随筆』も書けないので、もつぱらスチールとか、外国雑誌によるスタイルなど具体的な材料により、批判的な説明で、ニッポン・スタイルを示したいと思ひます。¹⁰⁾

谷の言う「モード随筆」は、「スタイル・ニッポン」の対面頁に掲載されていた芹葉輝夫¹¹⁾の「伊達男雑記」を指していると思われる。「スタイル・ニッポン」の本質は服飾流行の文化論であるが、日中間の政治の序列など時事的な話題を含む傾向にあり、これからのちは「なるべく、固い事は書かぬ様にしようと思ひます」という言葉の背景には、編輯部側からの何らかの要請があった可能性が指摘されている。¹³⁾谷の『スタイル』での連載の最後となる第3巻第5号の「スタイル・ニッポン」は以下のように結ばれている。

自己を良く認識し、時局を良く認識して、僅かのユトリで、われわれの青春と理想、美しさに憧憬れる心と美しいものを建設する喜びを、われわれに毎日必要な、衣食住に於いてのもつとも身近な服飾の美と経済の建設こそ、文化的な仕事であり銃後の若人のなさねばならぬことであると思ふのであります。

自然美、健康美、素直な若さ、明快な青春美の主個により、われらの服飾を精神から建設すべき時であります。¹⁴⁾

以後、谷が『スタイル』に執筆することはなく、第3巻第6号では、牛山隆介による「せんちめんたるス・フ」が掲載されており、水に弱いス・フの入った素材を使用することによって型崩れがおきる懸念

や、夏用の麻生地が軍用に転用されるために価格が高騰するといった戦争が衣生活に与える影響が述べられている。

第3巻第2号には、外国映画に見られる男性の髭、煙草、軍服を取り上げた「お洒落ミリタリズム」という特輯が組まれている。これは、外国映画におけるミリタリー・ファッションの隆盛に着目したものである。青木修二による「お洒落男子部 ア・ラ髭モード」では、ハリウッド俳優の髭について、戦争によって「ヒゲのもつ男性味が漸く一般化されてきたから、今度はいよいよ本格的に流行するだろうと思う」と髭の流行が予測されている。そして、外套などに見られるラグラン袖が戦争と関わりがあることを例に出して「男の流行と戦争とはよほど縁がある¹⁵⁾と見える」と述べられている。「軍服の魅力」では、ユニフォームとしての軍服を着ることで、「その身をかくす術を獲得した軍服名優」を取り上げ、ユニフォームが隆盛する時代はその国が「時代の王者たらんとし、時代の征服者たらんとするとき」であり、「一九三八年は新しいユニフォームの時代ではな¹⁶⁾なかろうか。」と述べられている。

2) 「ヴォーグ・スタジオ」と「スタイル専科」

1937(昭和12)年8月に国民精神総動員法が実施され、出版メディアにおいても非常時の服装が取り上げられるようになっていたが、『スタイル』の洋装頁は、『ヴォーグ』など海外のファッション雑誌をもとにした編集が続けられていた。1936年11月頃から『スタイル』の編集に関わった松井直樹は、『ヴォーグ』や『ハーバース・バザー』は「われわれの聖典¹⁷⁾のようなものだった」と述べている。

創刊以来の海外からの写真によるグラビア頁、編集部が力をいれていた特写¹⁸⁾、スタイル画によって

流行を伝える「STYLE PATTERN」に第3巻から「ヴォーグ・スタジオ」が加わる。著者は館真¹⁹⁾である。「ヴォーグ・スタジオ」は、海外のファッション雑誌からピックアップしたファッション情報を紹介するもので、1月号では新しいファスナーと組紐装飾が取り上げられていた(図1)。この新しいファスナーは、ドレスの切替線などにも付けることができ、表からはステッチを入れたように見えるというものである。第3巻第3号のQetR(読者からの質問箱)には、価格や入手方法についての読者からの問合せとその回答が掲載されている。それによると、このようなファスナーは日本にはまだなく、「あの紹介は、ああ云うファスナーをこちらでも作って欲しいと思って書いたもので、ほんとは専門家に注目して欲しいのです。」²¹⁾と記されている。

組紐装飾については「軍服の肋骨や肩章などを暗示することからこのモードが現れるのでせう」とした上で、「露骨に軍服を思ひだすやうなものではなく、実に自然に今日の風潮を暗示的にほめかしてゐる」組紐装飾のついたジャケットやドレスが紹介されている。²²⁾「STYLE PATTERN」には、毛皮を肩章や肋骨飾風につけた軍国調のジャケットが掲載されており、軍国調の流行を確認することができる(図2)。第3巻第2号の「ヴォーグ・スタジオ」ではウインザー公爵夫人のパリでのお買い物、第3号では「春のマセマティクス」として3つのスタイルでつくる7つの着こなしが掲載されており、ハイ・ファッションにおけるワードローブの設計を学ぶことができる。第5号では「ヴォーグ・スタジオ」で春の新しいカットラインが解説されており、「STYLE PATTERN」では郊外と街での装いが取り上げられている。

「ヴォーグ・スタジオ」や「STYLE PATTERN」



図1 「ヴォーグ・スタジオ」(図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第1号、34-35頁)



図2 「STYLE PATTERN」(図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第1号、30頁)

が海外のファッション情報を伝えるものであったのに対して、「スタイル専科」は、「歩き方」「タバコの喫ひ方」「帽子の被り方」など、装いや身のこなしに関する実践的なテーマについて、複数の著者がそれぞれの立場で意見を述べるもので、その内容は、執筆者自身の体験に基づくものや、啓蒙的な観点によるものなど様々であるが、添えられている写真は、「浴衣の着こなし方」（第3巻第8号）のような和装に関する場合を除いては、海外雑誌から転用されたものが使われていた。これは化粧や男物の頁にも通ずるため、結果的に『スタイル』には海外俳優の写真が多く掲載されていた。

第3巻第7号から『スタイル』の巻末には、読み終わったら戦地へ送ってほしいという読者へのメッセージが掲載されるようになるが、この号からグラビアの海外ファッション情報の頁が少なくなり、日本の名流女性のワードローブを紹介する「洋装訪問名流ベストドレッサー」が始まっている。編集後記には、以下のように企画の意図が記されており、誌面の変化が始まったと考えられる。

日本の洋装ももう大分日常的になってきましたけれど、ふだんは眼に触れてゐない深窓の方々には、洋裁家よりも却って専門に研究なさってゐる方が多いと思います。そういう方々に、いろいろお話を伺いたいと思ったのですが、幸いに予期²³⁾以上の素晴らしいものが出来上がりました。

3) 和装における懐古趣味と創作着物

『スタイル』の和装頁は、芸妓の写真と和装に関する随筆が主であったが、第3巻では芸妓以外をモ

デルとした和装写真がほぼ毎号掲載されるようになる。第3巻第1号はお正月ということで、女優の竹久千恵子の和装写真、訪問着の着付け、お嬢様の日本髪と芸妓の写真が2枚掲載されている。随筆は森田²⁴⁾と藤田嗣治である。藤田は近頃のきものは感心出来ないとして「徳川時代の趣味の洗練されたもの、美術味のある凝った道楽趣味の研究をして煎じつめたもの」²⁵⁾ができないかと思うと述べている。第3巻第2号には、銀座ミラテスの古代銘仙による着物と黒緇子の帯を着けたエリコの写真(図3)と宇野千代の「細かい柄のキモノ」という文章が掲載されている。これは、宇野が『スタイル』誌上において提唱した「新しいきもの」の具現化であり²⁶⁾、写真のキャプションには「そこはかとな元禄調の時代錯誤的な美がネラヒです」と記されている。岡田八千代²⁸⁾の「和服随筆」には、子どもの頃の思い出が記されており、木綿の着物に黒緇子の襟をかけることが普通で、絹物にかけると芸者のようだと言われ、木綿物に襟をかけないと山の手のおさんのようだ(野暮な事)²⁹⁾とされていたことなどが回想されている。第3巻第4号の「明治風俗」には、洋風令嬢、中年才媛女史、女役者、貴顕の令嬢、名流奥様の着物が解説つきで掲載されていた。

第3巻第4号の「飾窓」には、吉田謙吉³⁰⁾、宇野三吾³¹⁾らによる創作着物が紹介されている(図4)。これはウール地に貝殻をつけたり、洋服地をつかったり、和服地に革をあしらったりするものから、柳宗悦の案による芹澤銑介の着物と柳悦孝³²⁾の帯まで多様である。植木力³³⁾の着物(図4中央)は、赤みがかった葡萄色のアンゴラを用い、縫い目にステッチがかり、帯には金属製の飾りがついたもので、



図3 細かい柄のきもの (図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第2号 45頁)



図4 飾窓(図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第4号 58-59頁)

「洋服を和服化したもの」³⁴⁾だと説明されている。

第3巻第5号からは和服訪問記が始まっており、宇野が担当となる第7号は、藤田嗣治の和服訪問である。藤田は、「いろんな材料を使って面白いキモノを作って見たいと思ふんですがね。袖が木綿で、胴が麻、衿は羅紗をつかって、裾に革をはぎ合わせるといふ風にね、総合美術的な行き方でやると面白いんですよ」と述べ、「昔のキモノは、みんなそれをやってますよ。」と津軽のアッシやアイヌの麻の着物、革羽織などを見せて、宇野を圧倒している³⁵⁾。

Ⅲ. 第3巻第9号（1938年9月号）から第3巻第12号（1938年12月号）まで

1) 国策に添う雑誌への転換

第3巻第9号は、『スタイル』が「誰でもが気軽に手にとれるジャンティなお洒落雑誌」³⁶⁾から国策に添う雑誌への転換を表明した号である。宇野は編集後記に以下のように記している。

今月号から大分いろいろと誌面を改革してみました。少しでも、読者の方々に楽しみになるよう、又一面には非常時の国策にも添いますように、との心からです。御希望が御座いましたら、どしどし御注文下さいませ。³⁷⁾

この表明はやや唐突とも言えるが、第3巻第7号から巻末に、「お読みになったあとは皆さんのスタイルを戦地の兵隊さんに送ってあげて下さい」という読者へのメッセージが掲載されているので、「婦人雑誌ニ対スル取締方針」が公布された5月頃から、国策に沿う雑誌への方針転換の準備がなされていたと推察できる。第7号あたりから、グラビアの海外ファッション情報の頁が少なくなり、日本の名流女性のワードローブを紹介する「洋装訪問 名流ベストドレッサー」が始まり、スタイル画によって最新モードを伝える「STYLE PATTERN」の掲載は第7号が最後となる。

第9号では、誌面の刷新を明確にするため、海外ファッション情報が大きく割愛されている。グラビア頁には、ハリウッド女優の写真が掲載されているが、それは、ファッション情報を伝えるものではなく、ハリウッドから直送されたワーナー・スタジオのコレクションを紹介するものであった。解説には「これらのコレクションは単なるセンセーショナル

な流行的なものではありません。」と記されており、ハリウッド映画のコスチューム・デザイナーであるオリイ・ケイが個々の女優のためにデザインした着用者の個性を引き立てる「服飾美術的見地」による装いであることが主調³⁸⁾されていた。男子服の頁は、第9号から「お洒落男子部」が「男子専門部」となり、「伊達男雑記」は「モード国策線」（第3巻10号）、「伊達男国策版」（第3巻第11号）と見出しをかえながら、「俗流に媚びない名論」³⁹⁾が掲載されつづけた。それは、男子服の着こなし方を具体的に指南するというよりは、第3巻第3号で谷が揶揄するように述べた「モード随筆」⁴⁰⁾であった。

この誌面の改革の後も『スタイル』は、ハリウッド女優の写真の掲載を長く続けることになるのだが、それは、以下にのべるように『スタイル』が戦地に送られ、慰問品として好評を博し、中でもグラビア頁が人気であったことが理由であったと思われる。

2) 慰問品としての『スタイル』

第3巻第7号の巻末に掲載された「お読みになったあとは皆さんのスタイルを戦地の兵隊さんに送ってあげて下さい」は、『スタイル』が国策に添う雑誌への転換の方向性として、早いうちから慰問品という選択肢を検討していたと推察することができる。藤堂が指摘するように、1937年7月7日の『東京朝日新聞』の「国民の情熱籠る皇軍への慰問品」において、戦地で喜ばれる慰問品の中に娯楽雑誌が含まれているので、『スタイル』が戦地で好評を得ることはある程度予測できたと考えられる。1938年夏頃に実際にどれくらいの冊数が戦地に送られていたのかは不明であるが、第3巻第10号に記された編集後記から、『スタイル』が慰問品として好評だったことは明かである。宇野は次のように記している。

今月は、その上、北支派遣軍の兵隊さん達から大量に注文を頂いたりして、まごつくやら感激するやら、感謝に堪えませんでした。戦線にみると、スタイルのような雑誌が一番明るくて慰安になるそうですから、読者の方々もお読みになった後で、何卒兵隊さん達に送って上げて下さい。特にお願いして置きます。

古いものの再生と、和服頁を充実して、この際、特に時流を誤らないように努めたいと思ってをります⁴²⁾

第3巻第11号の編輯後記には、戦地から届いた感謝状が紹介されている。

スタイルってこれか、と無邪気な眼だけの様な戦友の顔が忽ち殺到。良い楽しい本を有難う御座います。やはり兵隊さんには日本の女優島田の姉さんが大もてですが、ケイ・フランシスはゲーブルはと喧しいヴォーグ氏も無きにしもあらずです。絢爛たるスタイルの出現に、陣中大騒ぎです。⁴³⁾

この手紙から、グラビア頁の女優や芸妓の写真が人気であったことがわかる。海外のファッション情報を伝えるためのファッション・グラビアは、兵士たちには女優の魅力を伝える写真と受け取られたのである。また芸妓の写真を含めた『スタイル』の特写は、『スタイル』が最も力を注いだものであったから、戦地で人気が高かったことは容易に推察できる。井竿は『スタイル』は「ファッション雑誌としてではなく、まさに華やかな銀幕の世界から精神的に慰問してくれる写真の載った刊行物として歓迎された可能性が高い」⁴⁵⁾と述べている。こうして慰問品としての評価を得ることによって、『スタイル』は明るく楽しい国策に添う雑誌という方向性を定めていき、慰問品としての要望に応えるかたちで、『スタイル』らしさを模索してゆくことになる。それは、第4巻第3号の編輯後記において宇野が述べている「明るく品良く愉しく！というスタイル独特の味わいを高度にハッキリ」⁴⁷⁾する雑誌をめざすことであった。

3) 代用品がつくる新しいモード

第3巻第9号からの誌面の刷新は、ス・フや代用品を取り上げることによってより明確に、視覚的に示されたと思われる。編輯後記には、代用品を紹介することについて「一口に代用品と云ってもいいものもあれば悪いものもありますが、どんな品をどういう風に使ったらいいかということは、読者の方々の誰方でもお考えになってゐられることでせう。その点の御便宜をも図りつつスタイル一流のスマートネスを発揮したもので、正に国策の線に沿った新計画であります。」⁴⁸⁾と記されている。第9号に掲載された「ス・フ織物」は、二科会の橋本徹郎⁴⁹⁾が経営する銀座の布帛工芸品ギャラリー「ブリュツケ」のテーブルセンターやネクタイ、クッションなどを紹

介するものであった(図5)。ス・フは、水に弱く、テーラーメイドに適さない素材であるため、男子服においてス・フの特性を生かすには、従来の男子服の型やラインを放棄するしかなく、また洗濯が難しいため敬遠されがちで、積極的に肯定されることは少なかった。パウハウスで学んだ山脇道子⁵¹⁾を通して手織りにふれた橋本は、ベンベルグ⁵²⁾の例を出して、ス・フの素材としての可能性を以下のように述べている。

今日ではベンベルグはすでに絹の代用品としてではなく、ベンベルグ自身の美しさや効用価値を認められて居ります。そして、それ無しでは私達の服装が考へられないまでに、大きな役割を持って居るのです。

ステープル・ファイバも同様のことが云へます。木綿や羊毛の代用品としてではなくて、全々別な味と特質を持つてゐるのです。

セロハンで作った帽子が決してストローの代用品ではない様に、ステープルの織物は、その触感や色調に於いて、はるかに木綿よりも美しいエフェクトを持つて居ります。⁵³⁾

第9号の「ヴォーグ・スタジオ」は、「代用品売場から」と題して、上野松坂屋の鮭皮のハンドバッグやベンベルグの足袋やブラウス、木製のコンパクト、ウツボ草履などを紹介している(図6)。そこには

代用品時代！ 新しい材料は常に新しい形と色とを創る

新しいモードは絶えず新しい材料の発見にかかつてゐる

新しいモードには新しい線がある

代用品時代——そこに新しい美しさの発見がひそんでゐる

新しい線——そこに新しい生活の角度がある⁵⁴⁾

というコピーが添えられている。代用品をポジティブな新しい材料として捉えようとする視点は、時局の求めに応じる方便とも言えるが、人工的に作り出された素材に新しい価値を見出すという姿勢は、1930年代のパリ・モードにおけるエルザ・スキヤパレリのショッキング・ピンクのセロハンを使

用したケープ（1937年）やジャン・パトゥーのレーヨン・ニットのジャンプ・スーツ（1929）、マドレーヌ・ヴィオネのレーヨン・ジャージーのドレス（1933年）などに通じるものである。

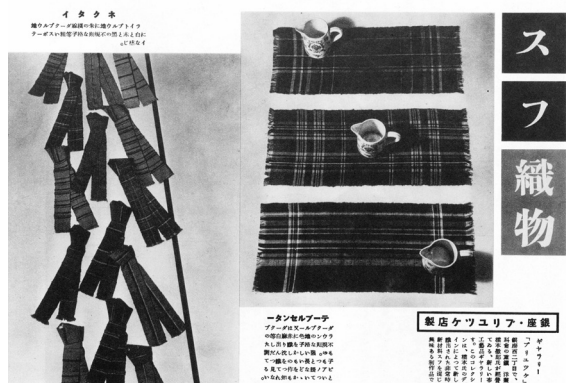


図5 ス・フ織物(図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第9号 46頁)

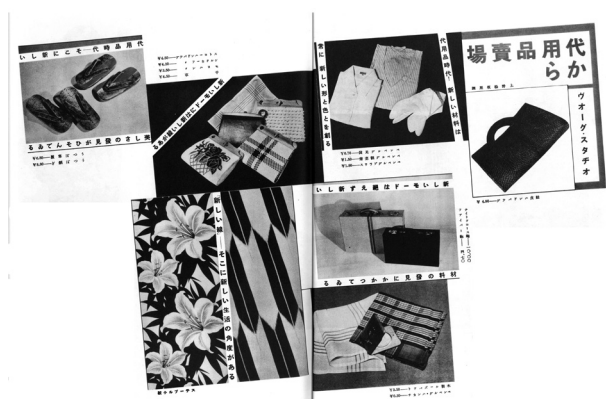


図6 「ヴォーグ・スタジオ 代用品売場から」(図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第9号 52-53頁)

4) 「趣味新版」

第3巻第10号の和服訪問記において、宇野は、宮川曼魚⁵⁵⁾宅を訪ねた時のことを次のように記している。

私は先生にお願ひして、御蒐集の古い木綿その他の布を見せていただきました。先生の御趣味もさること乍ら時節柄、わざわざ新しいものを買はずとも、古い布であれこれと工夫して、新しいもので作ったものよりもっと趣味のあるものを作り出す、積極的な古物再製法の一案として、この訪問記を意味あるものとしたかったのです。⁵⁶⁾

そして、宇野のいう「積極的な古物再製法」は、『スタイル』執筆陣の個性あふれるアイデアを集め

た「趣味新版 古いものでもこのとおり」として第10号から第12号まで掲載された。第10号には花柳壽美⁵⁷⁾「草履ネクタイ」、森田たま「結城で足袋を」、宇野千代「田舎日記」、第11号は藤田嗣治⁵⁸⁾「古い布を利用して」、藤川榮子⁵⁸⁾「古いキャンバスから」、宇野千代「古布の寄せ集め」、第12号は里見弴⁵⁹⁾「古着屋あさり」、山根千恵子「新生秘訣!」、村松梢風⁵⁹⁾「手拭暖簾」が掲載されている。いずれも古い物や長く使われずしまいこまれていたものに新しい価値をあたえようとするもので、古いものだからこそその美しさを生かす工夫が見られる。花柳壽美の刺繍の半襟による草履や藤川榮子の油絵が描かれた古いキャンバスのトートバッグなどユニークなものがある一方で、藤田は「古い布を使って作ったものは、何とも云はれぬ味が有る物です。」と述べ、「紺紺は洗へば洗ふ程面白い味が出て来る」「洗ざらしのはげたものの方がかへって渋みがあります」と、何度も水をくぐることによって生み出された古布の美について述べている。宇野は、岩国の生家の蔵から持ち帰った行灯の紙を自分で貼り替えて電気式の照明に作り替えたり、布団縞の古木綿をテーブル掛けとして使っていることを紹介し、「古いものをただ飾って列べて置くだけの骨董趣味ではなく、かうしたら実用に来る、などと考えて見るのも女らしい趣味の一つです。」⁶¹⁾と述べている。

5) 和装における懐古趣味と異国趣味

宇野は第3巻第10号の編輯後記において、和装頁を充実させると述べている。第10号には先に挙げた宮川曼魚和服訪問の他、「スタイル相談所」として「帯の結び方」が取り上げられ、早見君子⁶²⁾による「粋な背線美を」と小寺菊子⁶³⁾による「狭く低く」が掲載されている。どちらも胸高に大きな四角い箱を背負うような「お太鼓」に意義を唱えており、添えられた図版は鈴木春信の浮世絵から取られている。早見は着付けの専門家の立場で、帯の位置の変化を取り上げ、袖丈が短くなることに合わせて「文庫くづし」や「貝の口」などの結び方が行われるようになり、背面の美しさが注目されるようになったとして、戦時体制を意識した和装の簡素化が求められていることには触れずに、「江戸時代の帯のやうに、肩と腰の線に何ともいはいれない女の味を出してゐて、しかも品を保ってゐてこそ帯の生命がはつきりする」⁶⁴⁾と述べている。グラビア頁には早見の監修に

よる「文庫くづし」「貝の口」「千鳥結び」「りぼん結び」の写真が解説つきで掲載されているが、ここでは「キレイな背線美がとてもシックで寧ろモダンでせう」（文庫くづし）、「丁度洋風と日本風のアイノコのやうな味ひがあります」（りぼん結び）と述べられている（図7）。

第11号の和服訪問記は、日本画家の鎗木清方で、「清方好みの日本模様」として清方の娘泰子の着物が紹介されている。これに対して第12号は、仲田菊代⁶⁵⁾で、「板についてる異国趣味」として、普段着姿の仲田の写真が掲載されている（図8）。仲田は、反物を選ぶ際に洋服みたいな柄が好きだと述べており、宇野は仲田の着物と帯はみなデパートなどで売っているものであるが、

ただそれを撰り出すときの仲田さんの色彩感覚が、ある特殊な、謂はば舶来趣味なのではないかと思ひます。布地は確かに日本の普通のものだけけれど、色が舶来趣味なのです。而も、ぴったりと板についた、渋い——何とも言へない特徴のある良い趣味なのです。⁶⁶⁾

と評している。仲田の和服訪問記の脇には、「お江戸趣味の合羽姿の小菊姐さん」として黒い天鵝絨の衿のかかった藍微塵（あいみじん）の雨合羽が掲載されており、和装における異国趣味は、お江戸趣味の中に見出すことができることが示されている。

6) 「日本調のエキゾティズム」と「パリス・オープンング」の懐古趣味

先に述べたように、第3巻第9号では、グラビア頁に海外ファッション情報ではなく、ワーナー・スタジオのコレクションが掲載されたのだが、第10号では、「日本調のエキゾティズム」（図9）が掲載されている。一越縮緬にレースのアップリケを着けたアフタヌーンドレスや綸子地に日本刺繍で薔薇模様を絵羽風につけたカクテルドレスなど、日本の伝統的な素材や装飾技法を用いた和風とも洋風とも異なる不思議なエキゾティシズムが作り出されている。それは、第3巻第4号「飾窓」の植木力の「洋服を和服化した」⁶⁷⁾きものの洋装版と言えよう。この「日本調のエキゾティズム」について、館眞は、「優美はいつも伝統の草叢に咲き、新しい美学の宝石もジツは古い手管の中に蔵つてある」⁶⁸⁾と記している。これは、代用品や「趣味新版」だけではなく、創刊初期の銀座ミラテスの広幅手織銘仙を用いた「スタイル推薦衣裳」や宇野千代の「新しいきもの」にも通じると言えよう。

第11号からは再び海外ファッション情報が掲載されており、「ヴォーグ・スタジオ」では、ハリウッドの「コスチューム映画に現れた懐古趣味」と題して、コスチューム・ブレイの衣装を取り上げながら、懐古調のファッションへの言及がなされている。1938年8月のパリで開催されたコレクション「パリス・オープンング」では、高く結い上げた髪、高い衿、膨らんだ袖、大きく広がるスカート、手袋、ブーツ、小さな帽子といったヴィクトリア朝風の懐



図7 くづし帯（図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第10号 46-47頁）



図8 仲田菊代（図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第12号 46頁）

古調のファッションが提示されていた。『スタイル』では、第3巻第11号と12号の「ヴォーグ・スタジオ」で、「パリス・オープニング」を取り上げている。第11号の「パリス・オープニング早見案内」では、「パリス・オープニング」を取り上げる意義が次のように記されている。

『パリス・オープニング』は決して浅ましきジャーナリスティックなファッションではありません。ここに掲げたシルエットの様々も、その輪郭は一見誇張的に見えても、ファッションレポーターが直ぐに面白可笑しく傀儡にしてしまふやうな、扇動的な題材ではありません。その強調されたアイディアに、今日の衣裳史が、今日一九三八年の歴史を如何に語るかを学ぶべきものであるのです⁽⁶⁹⁾

少し大仰な印象を受けるが、同時期の『婦人画報』では、「パリス・オープニング」情報を掲載するにあたり、「戦時下の日本の女性には関係がないことだといってしまへばそれまでですが、文化の標準を示す女性の流行がどんな動きをしてゐるかといふ

ことを知っておくことは、日本の女性の教養として、知識として必要なことであろうかと存じます。」⁽⁷⁰⁾と非常時においても必要な教養であることを強調した表現になっており、洋装の規範がパリ・モードに置かれていたことが伺える。

第3巻第12号のグラビア頁には、松井直樹による新しいヴィクトリアン調のドレス(図10)が掲載されており、キャプションには以下のように記されている。

もの憂ひキュウピット・ピンクの格子タフタのイヴニング。高い衿、膨らんだ袖、リボン結びで締めつけた細い腰、広いフレイヤーのスカート——新しいヴィクトリアン調です。一九〇〇年代の誇張的なシルエットをできるだけ単純化して企てたもの。英吉利風の揚巻の髪。黒ビロードの幾つもの蝶結びも古典的な飾り方です。格子縞はそもそも十九世紀末のモードです。⁽⁷¹⁾

この号から新設された「洋装専門部」では、「昔にかへる女らしさ」と題してヴィクトリア調の流行が取り



図9 ヴィクトリア朝ドレス(図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第12号 28頁)



図10 日本調のエキゾティズム(図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第10号 19頁)

上げられており、世界情勢の厳しさが女性に優雅で古典的な女性らしさを求めているのではと述べている。⁷²⁾

第3巻第9号における国策に添う雑誌への転換は、『スタイル』の誌面から海外ファッション情報を割愛することによって、視覚的に示されたが、時代のモードでもあった懐古趣味を全面に出すことによって、第11号からハリウッド女優の写真によるファッション情報の掲載が復活する。そしてそれは、慰問品としての『スタイル』に戦地の兵士たちが求める重要なコンテンツでもあった。

IV. おわりに

1938年5月に「婦人雑誌ニ対スル取締方針」が公布された後も、『スタイル』は、海外ファッション情報を中心としたグラビア頁やお洒落コントなどの読みもの、女優の訪問記など盛りだくさんの内容の楽しい総合雑誌として刊行が続けられた。第3巻第7号からは、巻末に読み終わった『スタイル』を戦地に送ってほしいというメッセージが掲載されており、国策に添うことを意識して『スタイル』を慰問品とすることが始められる。第3巻第9号において、楽しいお洒落雑誌から国策に添う雑誌へと転換を始めた『スタイル』は、創刊以来の主要なコンテンツであった海外ファッション情報を割愛し、ス・フや代用品を積極的に取り上げ、古いものや蔵などに長く死蔵されていたものを再生させる記事を掲載することで、国策に添う姿勢を示す。しかし、グラビアの海外ファッション情報は、慰問品としての『スタイル』にとっても重要なコンテンツであったため、第11号から再び掲載されるようになる。洋装における懐古趣味を反映した「日本調のエキゾティズム」は、創刊初期の「スタイル推薦衣裳」に、和装における懐古趣味や異国趣味は、国策を意識した古物の再生などと共に宇野千代の「新しいきもの」に通じるものである。『スタイル』第3巻の装飾記事は、事局の要請を巧みに読み取りながら『スタイル』らしさを維持する試行が繰り返されたと言える。そしてそれは、『スタイル』が、第4巻以降、国策に沿う「明るく品良く楽しい」娯楽雑誌となっていく方向性を定めてゆく過程ととらえることができる。

(本稿は2024年度山口県立大学創作研究活動助成の採択を受けて行った成果をまとめたものである。)

- 1) 編輯後記、『スタイル』第2巻第3号、P64。
- 2) 『工芸ニュース』第7巻第1号には、「時局に見る婦人用活動服」として、「非常時婦人活動服展」が取り上げられている。(『工芸ニュース』第7巻第1号、1938年1月、pp.22-23)
- 3) 『朝日新聞』では、1937年10月18日から10月26日まで8回にわたって「非常服めぐり」が連載されている。『婦人画報』404号(1937年10月号)には伊東茂平による「非常時の日本婦人の服装について」が掲載されている。
- 4) 編輯後記、『スタイル』第3巻第1号、p.80。
- 5) 編輯後記、『スタイル』第3巻第6号、p.80。
- 6) 朝日新聞 1938年7月18日
- 7) 谷長二「スタイル・ニッポン」、『スタイル』第3巻第2号、p.33。
- 8) 谷長二「スタイル・ニッポン」、『スタイル』第3巻第2号、p.33。
谷は、『婦人画報』の「事変下のモードはこういふ意義をもつ」において、日本は世界的な国家なのだから「外交にしても、政治にしても、既に世界の常識の上に立たねばなりませんので、衣服においても、国際的な洋装の上に新しいスタイルが作られ、着られなければならないのであります。ですから今迄のモードも良く検討して日本に適する良い所はどしどし取り入れて役に立てなければなりません。」と述べている。(『婦人画報』416号(1938年10月) p.154)
- 9) 谷長二「スタイル・ニッポン」、『スタイル』第3巻第2号、p.33。
- 10) 谷長二「スタイル・ニッポン」、『スタイル』第3巻第3号、p.32。
- 11) 芹葉輝夫については、詳細が不明であるが、第1巻第7号(1936年12月号)の編輯後記に「男ものの洋服欄は、至るところで評判が好い。英国生粋の服装道を説くところ、絶対に他誌の追随を許さぬ境地を持ってゐる。この欄の担当者は、在英十二年の原奎一郎氏。小説家、随筆家として既に一家を成してゐる方である。

ところで、原氏担当頁を英国版とすれば、次号あたりから、アメリカ版とも言え言える実用中心の男ものの頁を追加して見ようと思つてゐる。——この方の受持は、谷長二氏を煩わすことにした。」と記されているので、芹葉輝夫は原奎

- 一郎の別名である可能性が高いと考える。
- 12) 谷長二「スタイル・ニッポン」第3巻第3号、p.32。
 - 13) 井竿富雄「雑誌『スタイル』と初期日中戦争、一九三六―一九三八」『山口県立大学学術情報第16号、2023年3月、p.4。
 - 14) 谷長二「スタイル・ニッポン」、『スタイル』第3巻第5号、p.42。
 - 15) 青木修二「お洒落男子部 ア・ラ髭モード」、『スタイル』第3巻第2号、pp.38-39。
 - 16) 「軍服の魅力」、『スタイル』第3巻第2号、pp。
 - 17) 松井直樹「日本の服飾雑誌1」、『カラーデザイン』第2巻第8号、1956年、p.11。
 - 18) 『スタイル』第2巻第2号の編輯後記において、宇野は「本号の特写は、どれもスタイル社ゴジマンのもの。どの写真もちゃんと一つのテーマをもってゐて、ドレスによって、構成的なセット考案の苦心の跡のあるのをみていただきたい。モードのデザインを間に合わせの背景に立たせて、カメラを向けるなんぞのいい加減なことはもうユルサレナイ。次々とユニックなコンポジションをご覧に入れるつもり」と記している。創刊から第二巻までの『スタイル』のグラビア写真については、拙稿「宇野千代編集の雑誌『スタイル』における初期グラビアと「スタイル推薦衣裳」について〔山口県立大学学術情報第15号（国際文化学部紀要 通巻第28号）2022年、pp.197-205〕および「宇野千代編集の雑誌『スタイル』に見る洋装と和装―第2巻第1号(1937年1月号)から第2巻第12号(1937年12月号)まで―」〔山口県立大学学術情報第17号（国際文化学部紀要 通巻第30号）2024年、pp.57-67〕において考察した。
 - 19) 館真については詳細が不明である。『スタイル』には第1巻第7号から名前を見ることができる。
 - 20) 館真「ヴォーグ・スタヂオ」、『スタイル』第3巻第1号、p.34。
 - 21) QetR、『スタイル』第3巻第3号、p.70。
 - 22) 館真「ヴォーグ・スタヂオ」、『スタイル』第3巻第1号、p.35。
 - 23) 編輯後記『スタイル』第3巻第7号、p.72。
 - 24) 森田たま（1984-1970）小説家、随筆家。『スタイル』には第1巻第2号より和装に関する随筆を掲載している。
 - 25) 藤田嗣治「お正月は日本娘に」『スタイル』第3巻第1号、p.47。
 - 26) 宇野千代の「新しいきもの」については、拙稿「雑誌『スタイル』に見る宇野千代の「新しいきもの」〔山口県立大学学術情報第16号（国際文化学部紀要 通巻29号）、2023年3月、pp.165-175〕において考察した。
 - 27) 『スタイル』第3巻第2号 p.45。
 - 28) 岡田八千代（1883-1962）小説家、劇作家。
 - 29) 岡田八千代「和服随筆」『スタイル』第3巻第2号、p.43。
 - 30) 吉田謙吉（1897-1982）舞台美術家。
 - 31) 宇野三吾（1902-1988）陶芸家。
 - 32) 芹澤銑介（1895-1984）型絵染を得意とする染色家。柳悦孝（1911-2003）染織家。民芸運動の提唱者である柳宗悦（1889-1961）の甥。
 - 33) 植木力（1913-2003）彫刻家。
 - 34) 「飾窓」『スタイル』第3巻第4号、pp.58-59。
 - 35) 宇野千代「藤田嗣治画伯 和服訪問記」、『スタイル』第3巻第7号、P.32。（藤田は実際に異なる素材を組み合わせた着物のデザインを行っている。『婦人画報』1937年12月号（406号）には、異なる素材を組み合わせた2部式の着物のデザインが掲載されており、『婦人画報』1938年10月号（416号）にその実作写真が掲載されている。）
 - 36) 編輯後記、『スタイル』第3巻第1号、p.80。
 - 37) 編輯後記、『スタイル』第3巻第9号、p.72。
 - 38) 「ワーナー・オン・パレード」、『スタイル』第3巻第9号 p.20。
 - 39) 編輯後記『スタイル』第3巻第10号、p.72。
 - 40) 谷長二「スタイル・ニッポン」、『スタイル』第3巻第3号、p.32。
 - 41) 藤堂友美「第一期『スタイル』刊行の戦略」、国文目白、50号、2011年、pp.53-62。
 - 42) 編輯後記『スタイル』第4巻第10号、p.80。
 - 43) 編輯後記『スタイル』第4巻第11号、p.80。
 - 44) 注18に同じ。
 - 45) 井竿富雄、前掲論文、p.6。
 - 46) 藤堂友美は、「第一期『スタイル』刊行の戦略」（国文目白、50号、2011年、pp.53-62）において、『スタイル』が慰問品として戦地に送り続けられたことによって、その業績が認められ、1940年12月に国指定型B5版の認可を受けることになり、その後の雑誌の継続につながったのでは

ないかと述べている。

- 47) 編輯後記、『スタイル』第4巻第3号、p.72。
- 48) 編輯後記、『スタイル』第3巻第9号、p.72。
- 49) 橋本徹郎（1900－1959）洋画家・グラフィックデザイナー。
- 50) 芹場輝夫は、紳士服が純毛素材を前提としたものであり、ス・フ入り素材では従来のように仕上がらないのだから、ス・フを生かすには「外套で云ったらラグラン風の様なゆったりした、細かな味は無いが、のんびりした、どっちかといふとスポーツ型と称す可きスタイルが、今後の紳士洋服が必然的に辿る傾向ではないかと予想される」と述べている。（芹場輝夫「今日の男性 洋服はどうか？ スフ地登場によるスタイルの変遷について」、『スタイル』第4巻第12号、pp.44-45）
- 51) 山脇道子（1910－2000）デザイナー、テキスタイルアーティスト。
- 52) 繊維名はキュプラ。ベンベルグは商標名で、日本では1931年より旭化成株式会社の前身の一つである日本ベンベルグ絹絲の延岡工場において生産されていた。
- 53) 『スタイル』第3巻第9号 p.47。
- 54) 「ヴォーグ・スタディオ 代用品売場から」、『スタイル』第3巻第9号、pp. 52-53。
- 55) 宮川曼魚（1886－1957）随筆家、鰻屋「宮川」主人。
- 56) 宇野千代「和服訪問宮川曼魚先生 浮世絵の小町娘」、『スタイル』第3巻第10号、pp.32-33。
- 57) 花柳壽美（1898－1947）本名は大橋勇 日本舞踊家。
- 58) 藤川榮子（1900－1983）洋画家。
- 59) 村松梢風（1889－1961）本名は村松義一 小説家。
- 60) 藤田嗣治「古い布を利用して」、『スタイル』第3巻第11号、pp.66。
- 61) 宇野千代「田舎日記」、『スタイル』第3巻第10号、p.63。
- 62) 早見君子（1885-1963）美容家。
- 63) 小寺菊子（1884-1956）小説家
- 64) 早見君子「粋な背線美を」『スタイル』第3巻第10号p.42。
- 65) 仲田菊代（1902-1995）洋画家 仲田は、第1巻第3号で白緋の帷子に矢の字模様の単帯、ドイツの古い陶器の貨幣を帯止めに用いた和装姿を披露している。
- 66) 宇野千代「和服訪問 板についてる舶来趣味」『スタイル』第3巻第12号、pp.32-33。
- 67) 「飾窓」、『スタイル』第3巻第4号、pp.58-59。
- 68) 館眞「日本調のエキゾティシズム」、『スタイル』第3巻第10号、pp.18-19。
- 69) 『スタイル』第3巻第12号 pp.52-53。
- 70) 田中雅夫「流行の王座 パリスオープニング」、『婦人画報』1938年12月号（418号）p.69。
- 71) 『スタイル』第3巻第12号 p.28。
- 72) 館眞「洋装専門部 昔にかへる女らしさ」、『スタイル』第3巻第12号、pp.42-43。